

褐鉄鉢容器に納められた
ヒスイ勾玉まがたま



1号勾玉



2号勾玉

●コレクション・データ

時代 弥生時代中期
調査 唐古・鍵遺跡第80次調査
発見年 2000年
大きさ 1号勾玉：長さ4.16cm、厚さ1.94cm
重さ48.15g
2号勾玉：長さ3.63cm、厚さ1.24cm
重さ16.38g
展示位置 第1・2室 ゲート・小窓ケース

今回紹介する2点のヒスイ勾玉は、褐鉄鉢容器に納められていたもので、大きい方は白濁部分に薄い緑色が混ざったもの、小さい方は濃緑色の透過質のヒスイが使われています。この2つのヒスイは、弥生時代に使われたヒスイとしては最も良質な部類に入るものです。

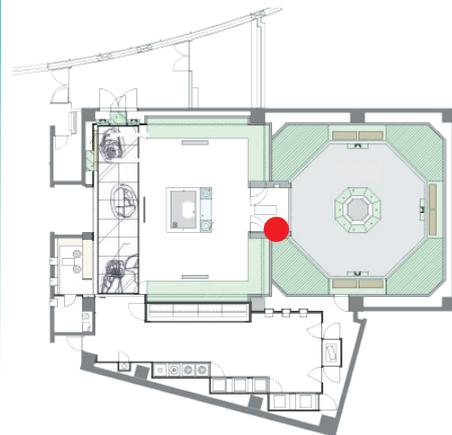
さて、ヒスイは、高压変成帯で生成される岩石で正式には「ヒスイ輝石」(jadeite)といわれます。硬度は6から7と硬質で宝石として人気があります。日本では約10ヶ所の産地が知られていますが、蛍光X線による科学的な分析で、全国で出土するヒスイ製品の大部分が、新潟県の姫川流域産であることが確認されています。

この姫川のヒスイをめぐるのは、『万葉集』に次のような歌があります。沼名川の底なる玉 求めて得てし玉かも 拾いて 得てし玉かも あたらしき 君が 老ゆらく惜しも

「沼名川」は姫川と考えられ、古代には、川底からヒスイを拾っていた様子がうかがえます。また姫川下流の青海海岸では、波で打ち上げられたヒスイをみることで上がります。『三国志』魏志倭人伝には「青大句(勾)珠」とあり、ヒスイを示すと考えられていますが、中国では「珠」は川や海で採れるものを意味しており、姫川流域でのヒスイの採取方法と一致します。

褐鉄鉢容器に納められていた2点の勾玉は、神仙思想の仙薬(「太乙禹余粮」との関連が注目されます。方格規矩鏡の銘文には「神仙界を訪ねて、玉を食べ黄金を撰れば、官位は昇進し子孫は繁栄する」とあり、玉と神仙思想との深い繋がりが見受けられます。

唐古・鍵遺跡で出土したヒスイ勾玉は、弥生人が玉に込めた想いを読み解く鍵になるかもしれません。



ミュージアム上面図と展示位置